

【海外の教育事情】

韓国の大学生が日本留学を必要とする理由

—大学の日本語教育現場から—

The Reasons for the Needs of Korean Students
Studying Abroad in Japan:
From Japanese Educational Site at University

忠南大学校日語日文学科招聘教授 松原 嘉子

MATSUBARA Yoshiko

(Invitation Professor, Japanese Language and Literature, Chungnam University)

キーワード：韓国、日本語教育

韓国の大学での日本語教育の状況

近年、韓国での日本語教育は、高等学校での第二外国語履修が必須では無くなったこともあり、日本語学習者の全体数が減少しているため、大学現場でも日語日文学科など、日本語のみを専攻する学科は生き残れず、アジア言語学科や貿易・通商学科などと統合されることが多くなってきている。また、学生のニーズとしても、日本語だけを学ぶより日本語と他の言語や他の分野の学問を併せて学びたいという意見が多く聞かれるようになり、実際に日語日文学を専攻している学生も複数専攻などで、他の学科の学位を取っている人が多い。このような状況であるため、このままでは韓国での日本語教育が成り立たなくなってしまうのではないかと懸念を抱いている教員も多い。しかし、実際に日語日文学科に進学してくる学生たちの話を聞いてみると、そこまで悲観的になる必要は無いのではないかとされる反応がみられる。日本語を専攻した理由を聞くと、第二外国語履修の必須とは関係なく、子供の時から漫画やアニメ、音楽など日本の文化に影響を受けたことにより日本語を勉強しはじめ、その延長線上として大学の進学を決めたと話す学生が半数以上を占める。つまり、第二外国語の履修が必須ではなくなったとしても、日本語や日本文化に興味を持ち、日本語を学習したいと思っている学生たちの基本数は一定に保たれているのではないかと考えられる。

韓国の大学生の日本留学に対する考え

前に述べたように、日本語学習者は絶対数として下げ止まりしたとして、日本への留学生はどうか。福島原発の放射能の危険性などの理由から、東日本への留学が懸念されてきたここ数年、関西や九州など、西日本への留学に移行してきていた。しかし、最近になり、政治的摩擦が強くなり、さらに、2016年の熊本地震により、安全とされていた九州まで危険地域であるという認識が高まったことで、日本への留学に対する不安感がさらに増し、結果的に留学生が全体的に激減しているのが現状である。

しかし、学生の指導を行っている上で感じられるのは、学生の日本留学の必要性への認識はあまり変わっていないということである。学生が日本へ留学するには、いくつかのルートが考えられる。本学から毎年一定数、日本へ送り出しているものとしては、提携を結んでいる大学への交換留学があり、それ以外には文部科学省の国費留学生や、法人や企業主催の留学プログラムなどがある。学生たちが最も望んでいるのは、単位の認定がある交換留学生として留学することであるため、その枠に入るために大学での成績はもちろん、学生会活動などへの参加を積極的に行い、選抜へのアピールに力を入れている学生が多い。中には、評定平均値が足りないと交換留学の枠にもれてしまうため、どうにかして成績を上げたいと相談に来る学生も少なくない。

日本への留学を考えるのであれば、提携している大学だけでなく、私費留学であったり、自分が学びたい学科に直接応募したり、方法は様々であるが、既存ルートがない留学にはかなり消極的であると感じられる。日本留学への必要性への認識には変わりはないものの、新しい道を切り開いてまで留学に踏み切るまでの勇気がある学生が段々と減少しているのである。

これは、留学に限らず、あらゆることに対する取り組み方を見ても分かることであるが、韓国の学生は学歴競争の中で生き残るために、大学に入学するまで、綿密に決められたスケジュールの中で勉強をしてきている。つまり、親や学校が決めたルールの上を確実に走ること自体が学歴競争の勝者になる近道であると信じて突っ走ってきていたわけである。そのため、言われたことを完璧にこなすことについては、日本の学生に比べて数十倍も長けていると言えるだろう。しかし、一步ルールがなくなると右往左往してしまい、大学に入学して時間割の無い生活を行うこと自体に戸惑う学生も多々みられる。そうした中で、留学を考える時に、やはり提携大学や学校推薦の大学への交換留学などすでにルールがしかれている留学先以外に留学を考えるというのは、韓国社会で教育を受けてきた学生たちには、かなり大きな負担になっていると考えられる。

韓国では、海外へ留学すること自体が日本に比べてあまり特別なことではないという認識がある。その為、「海外であるから」または、「日本であるから」という理由により留学に消極的になっているわけではなく、既存の留学先であった大学や地域に不安材料ができてしまったことで、新規の大学、または先輩たちが行ったことのない新しい地域への日本留学というのは、「ルートがない道である」と

判断されるため、現在、日本留学自体への消極化が進んでいるように感じられているのではないかと
思われる。

就職へ向けての日本留学

それでも、既存ルートがある大学などへの留学については、まだまだ競争率が高いことからみても、
日本留学への必要性は高いということが分かる。それでは、なぜ学生たちは日本留学への必要性を感
じているのだろうか。

韓国の新卒就職率の低さについては、日本のニュースなどで取り上げられることも多々あり、周知
の事実である。実際に大学の卒業単位を全て取り終わっているにも関わらず、卒業保留という形で大
学生の身分を持ちながら、何年も就職浪人をしている学生がいるのが現状である。韓国では就職する
ために英語の資格試験 TOEIC の点数が 800 点以上必要であると言われていたほど、大学の卒業証書以
外の資格が全くない学生は、ほぼ就職ができないという現実がある。そのため、学生身分で就職浪人
をしながら資格試験の勉強をしている人が多いのである。また、特に日本語を専攻している学生は日
本語能力試験の資格はもちろん、そこに日本留学の経験の有無が必要となってくるのだ。これは、企
業が求めているわけではなく、日本語を武器として就職に臨んでくる競争相手に勝つためには、ただ
資格試験用に勉強した日本語の知識でははく、日本での経験と自然な日本語を流暢に話せるというこ
とが必要だと学生が認識しているからである。

韓国語は日本語と語順も同じであるため、ある程度のラインまでは大学での日本語教育や日本語塾
での学習で上達してしまうため、日本語が簡単であると考えやすい。しかし、実際に日本語を使いこ
なす、また社会人としてビジネスで日本語を使いこなすためには、日本的な表現というものを使えな
くは、ビジネス上では大きな障害になりかねない。学生が上級レベルになるとその壁を認識し始め、
自分の日本語能力に自信をなくしてしまうのである。日本の若者も同様であるが、韓国の大学生も確
実なものにしか手を出さなくなってきたおり、可能性の低いものに「挑戦する力」が弱いのである。
特に韓国の学生のほとんどが決められたレールの上を走っていくという教育を受けてきたため、その
傾向が顕著である。そのため、それまでのように、頑張りさえすれば結果が出るというものではない
「就職」という難関を乗り越えるためには、確実なものを手にしてからでないと進めない、つまり、
日本に就職、または日系企業へ就職しようと考えている学生は、「日本語能力試験に合格しないといけ
ない」、「留学をして日本語を完璧にしないといけない」と勝手に自らにハードルを与え、その材料が
揃わない限り就職に挑戦をしないという形が出来上がってしまっているのである。しかし、実際に日
系企業や日本にある企業に就職を決めた学生を見てみると、必ずしも日本留学の経験者というわけ
ではない。だが、学生は、準備が出来ていないと前に進めないのである。そのため、日本への留学とい
うのは、韓国の大学生にとっては就職に挑戦するための必須の武器であり、自信を持たせてくれるお

守り、もしくは手形のようなものになっているのである。

これから必要とされる日本留学への取り組み

前に述べたように韓国の大学生は日本への留学というものを就職という関門を通過するための手形のようなものと考えているため、必ずしも、日本の大学で勉強をしたいと考えているのではなく、「日本語が流暢に話せるようになればいい」「交換留学などで単位取得まで出来れば尚いい」と考えている学生も多いのではないかとと思われる。特に日本語を専攻している学生にその傾向が強い。

しかし、以前、工学部系の学生に日本語を教えていた時、日本留学に行った学生は、もちろん留学が就職へ向けての手形であるという考えはあったが、日本語を専攻している学生とは違い、日本語で自分の専攻である分野を勉強したい、日本の技術を勉強したいというプラスαの目的があった。つまり、日本語を道具として使うために勉強していて、日本語を専攻している学生の日本語を武器としようとしている考え方とは違っていた。現在、大学現場では日本語を専攻している学生の数は減少傾向であるといわれているが、日本語を道具として使おうとしている学生は一定数保たれていると考えられる。つまり、日本語を道具として使うための日本留学という考えをもっと強く打ち出していく必要があるのではないかと考える。

日本語を専攻している学生のほとんどは、日本語が好きで勉強を始めたという人が多いため、どうしても日本語を武器として勝負しようとしてしまう。そんな学生たちに講義をする時には、常に「日本語は道具でしかない」と話している。確かに、日本語を武器としてする通翻訳などの職業もある。しかし、韓国では通翻訳の職業はほとんどが、大学卒業後、通翻訳の大学院で学位を取り、やっと就職という道が見えてくるのであるが、それでも日系企業などの契約社員としてかなり低い待遇で働いている人が多い。一流の通翻訳家でない限り、専門家としての認知度が低い職業の一つであるだろう。そのゆえに、日本語を専攻とする学生には、日本語を道具として使える何かを見つけるべきだと話してはいるが、それをすぐ見つけられる学生は少ない。そんな中でも韓国の大学では複数専攻という制度が充実しているため、日本語だけでは厳しい就職戦線乗り越えられないと早くに気がついている学生は、日本語を専攻しながら IT などの学科を複数専攻で取っていたり、逆に工学部系の学科の学生が日本語を複数専攻で取っていたりと多様化してきている。

つまり、日本留学というのが日本語を学ぶための留学ではなく、日本語を道具として使えるようになるための留学であるという認識を持てるような学生への働きかけが不可欠になってきていると思われる。IT 関係と日本語の組み合わせや、アニメーションと日本語の組み合わせなど、現時点でも日本で韓国人の留学生が求められている業界も多いが、これから必要になっていく分野の専門家を育てるための留学案内が必要なのではないだろうか。それぞれの国の国内で必要になる分野が違ってくるが、韓国で言えば、福祉の分野やサービスの分野などソフト面を重視した分野では、ここ数年日本へ視察

団などを送ったり勉強会を開いたりと活発な活動がされているとよく言われている。特に韓国の少子高齢化は、日本に比べかなり加速度を増しており、高齢化で言えば、2030年には日本人の平均寿命を越えるという報道もされている程だ。しかし、韓国で日本のような老人介護サービスが充実しているとは言えないのが現状である。

韓国は日本に比べ急激な経済成長を遂げたこともあり、ハード面では日本も追いつかないくらいの最先端を行っている半面、ソフト面の弱さについては、まだまだ日本に学ぶべき部分があるという意見はよく聞かれる。このような分野を中心に日本語とソフト面を併せた日本留学の情報が求められてくるのではないだろうか。

韓国の大学の日本語教育で、今までのように語学と文学の専門性のみを追求していくだけでは、学生は魅力を感じなくなりこれから先細りしていく一方であることは、目に見えている。したがって、日本語を道具として使用できる日本語教育、つまり就職に向けた日本語教育を根底に置いたシラバス作り、それに合った日本留学へのルートを組み込んでいく必要があると考えられる。現在は日本留学というと、同系の学部同士、例えば、韓国の大学の日語日文学科は日本の大学の教育学部や文学部などと提携していることが多い。その他の学部で留学を考えている学生は日本の大学に付随している別科の日本語教育などを受けながら学部の授業を受けたりしている。しかし、すでに日本語を専攻してある程度日本語を道具として使えるようになっている学生に対して、日本で他の学部で副専攻などの概念で留学できる形がもっと充実していけば、新しい日本留学の形として、学生たちに浸透していくのではないだろうか。

現在の韓国の日本語離れはある程度進んでしまっている状態であるが、今、新しいシステム、ルートが構築され、日本語学習者が成功している例がもっと出てくれば、昔のように、日本への興味を持っている学生が積極的に日本語を勉強し始め、日本への留学そして、日本企業などで活躍してくれる日がくるのではないかと思う。